

研究題目

学力の基盤となる基本的な生活習慣の育成 ～生徒の主体的な活動と保護者と連携した啓発活動を通して～

目 次

- 1 はじめに
- 2 研究主題について
 - (1) 研究主題の設定理由
 - (2) 研究の仮説
- 3 研究の実際
 - (1) 生徒の主体的な活動
 - (2) 保護者と連携した啓発活動
- 4 研究の成果と課題
- 5 おわりに

熊本県御船町立御船中学校 校長 作田 潤一

1 はじめに

本校は、古くから熊本県上益城地方の政治・経済・文化の中心地であり、かつて県下屈指の醸造の商都として知られてきた御船町の唯一の中学校である。

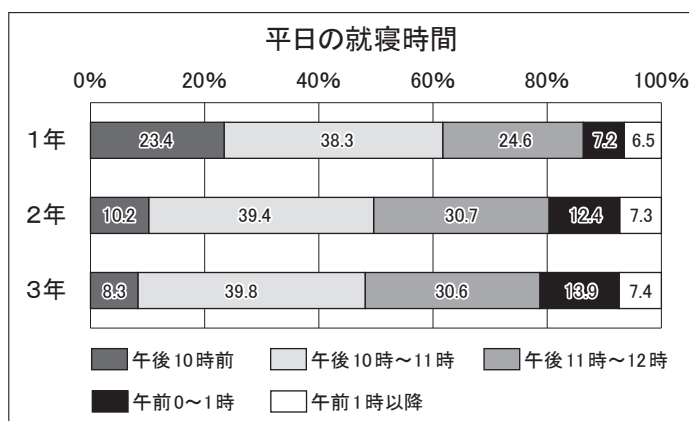
令和4年度は、通常学級12学級、特別支援学級6学級、全校生徒457人。上益城郡の中心校として、保護者や地域の協力の下、郡内教育・文化の拠点として輝かしい数多くの実績のある伝統校である。

第6期御船町総合計画のもと、「みんながわくわくする御船町」の将来像を実現すべく令和2年度からの特色ある学校づくりを進めている。

2 研究主題について

(1) 研究主題の設定理由

コロナ禍の3か月の休校明けからひと月が経った令和2年6月末、生徒の生活習慣に関する実態調査を行ったところ、毎日朝食を摂っている生徒の割合が78%に満たない状況で、深夜0時過ぎに就寝する生徒が約2割おり、平日にスマートフォン等を3時間以上使用している生徒が2割を超えていた。しかも、平日に家庭での自主学習に取り組んでいる時間が1時間に満たない生徒の割合が過半数であった。平成28年熊本地震の被害が甚大だった本町生徒の学力にも大きな課題があり、課題解決を図るために、学力形成の基盤となる基本的な生活習慣の育成に取り組むことにした。



生徒アンケート結果(R2.6実施)

また、自分の言動に自信

をもてない生徒が多いことも、本校の長年の教育課題であり、生徒の主体的な活動を適宜設けて、自己肯定感や表現力を生徒にはぐくみたいと考えた。

(2) 研究の仮説

- 自らの生活を見つめ直し、生活の具体的な改善策を考える生徒の主体的な活動を行う機会を適宜設ければ、生徒の基本的な生活習慣が定着するだろう。
- 保護者と連携して生活習慣に関する啓発活動を効果的に行えば、生徒の基本的な生活習慣が定着するだろう。

3 研究の実際

(1) 生徒の主体的な活動

今年度の重点成果指標(目指す生徒の姿)は、前年度末に生徒会執行部と各専門委員長が素案を考えて校長と面談して案を作成し、年度当初の職員会議、PTA総会を経て決定している。この重点成果指標の達成状況を年5回のアンケート調査で評価し、調査結果は、生徒、教職員、保護者等に公表している。

生徒や教職員等は、それぞれに調査結果から実践の課題に気づき、改善策を自ら考えて取り組んでいる。

この本校独自のPDCAサイクルを「CAP-Dシステム」と名付けている。成果指標であるC(チェック)から始まるという意味と、生徒・教職員・保護者等のつま先(CAP)を解決策の発見(Discover)に向かわせるという意味である。

【重点成果指標の例】

- ◎ 朝食を(毎日、ほとんど)食べている生徒の割合 95%以上(給食委員会)
- ◎ 「スマホ等の新ルール」を守っている生徒の割合 70%以上(生徒会執行部)
- ◎ 家庭学習をしている生徒の割合 各90%以上(文化学習委員会)
 - ・家庭学習開始時刻を守る
 - ・1時間以上の家庭学習をする

CAP-Dシステムを活用して、生活習慣の課題に気づいた生徒達は、次のような取組を創造した。

① スマホ等使用の新ルールの制定と活用

スマートフォンやゲーム機、テレビ等の使用状況に課題があることに気づいた生徒会執行部の生徒たちは、スマートフォン等の使用の約束を決めないことのデメリットを全校生徒に考えてもらおうと、自らアンケート項目を考えて調査を実施した。

「夜、友だちから連絡がくるので勉強に集中できない」等の困り感を共有して、約束事を決めることを全校集会で決め、各学級から提出された案をもとに“スマホ等使用の新ルール”を令和3年7月に制定した。



新ルールを提案する生徒会執行部

ルールを生徒全員に覚えてもらえるよう校名の“み・ふ・ね”になぞらえて、次のようなルールとなった。

御船中学校 スマホ・メディア使用の新ルール

- み 見逃さない 傷つける言葉 絶対に
他人の事を書かない 相手の気持ちを考えた発信・返信をする
- ふ フィルタリング かけて守ろう 自分の安全
個人情報や写真は絶対に載せない・送らない
- ね 眠たいな スマホもきっと思ってる
夜10時～朝6時は使用しない 使用時間は1時間以内

他人についての記述は、読み取り方次第では傷つく言葉として受け取られることや、短い文では真意が伝わりにくく誤解を生むことなどを例に挙げて、極力控えるよう呼び掛けた。

フィルタリングについては、生徒自身が設定を把握していない場合も少なくなく、保護者へ協力を呼び掛けるようにした。

令和3年度は、脳トレでも著名な東北大学加齢医学研究所所長の川島隆太氏を招聘したスマートフォン長時間使用の弊害に関する講演を執行部の運営で実施した。

講演を聞いた生徒は次のような感想を地元新聞社に投稿して掲載された。

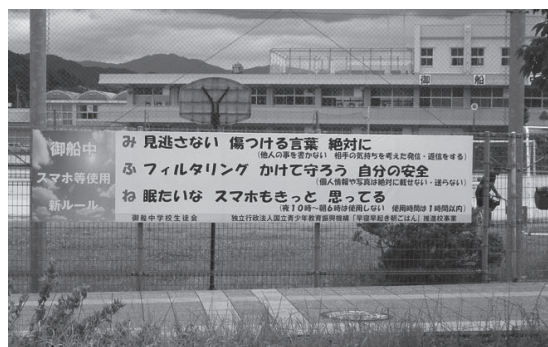
「私は、先日、基本的な生活習慣について話を聞きました。スマホの利用時間が長くなると脳に害を及ぼして、どんなに学習の努力をしても結果に結びつかない場合があるということでした。私は、スマホは使いませんが、タブレットやゲームを休日には2時間ぐらいすることがあるので、これからは時間を決めて使おうと思います。また、睡眠不足が続くと、脳の海馬の成長がとまり、早く認知症になってしまう確率が高くなるという話も聞き、驚きました。普段は夜11時ごろに寝るのですが、勉強が進まないと就寝が12時を過ぎることもあります。家庭学習のとりかかりを早くして早く寝るように心がけます。読書は想像力を豊かにするという事なので、好きな物語などを中心に読書を続けていこうと思います。朝食は、バランス良く食べると学習や運動でも効果があるそうなので、主食だけでなく、主菜や副菜もしっかりと食べるようにしたいです。基本的な生活習慣が私の未来を決めるので、もう一度自分の生活を見直してみようと思います。」

休校期間にスマートフォンを長時間使用する習慣になってしまったことを心配する生徒の質問に、「これからの生活が大切だ」と講師が励ます場面もあった。

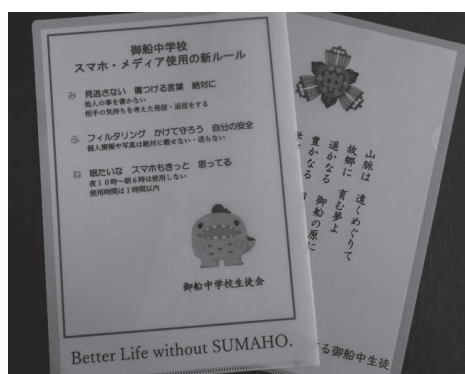
川島隆太氏から、スマートフォン等の使用時間は1日に1時間以内が望ましいと聞き、生徒たちは、このことを新ルールの項目に付け加えた。

また、数年前に生徒会が制定していた旧ルールがあったのだが、制定されていたことを生徒が誰も知らない実態もあった。このことをふまえて、横断幕やポスターを作成し、生徒自身が常に意識し、保護者・町民にも取組を応援していただけるようにした。加えて、啓発クリアファイルを作成し、全校生徒と町内小学生に配付した。令和4年度入学生へは4月の生徒会オリエンテーションの場で、令和5年度入学予定の小学6年生へは前年度10月の中学校説明会の場で、生徒会執行部がルールを説明して周知を図っている。

CAP-Dシステムのアンケート結果に課題が見えた場合は、アンケート結果をグラフ化してスクリーンに示し、ルール遵守の呼びかけを集会等で行っている。



新ルールの横断幕



啓発クリアファイル

② 生活リズムチェック週間の実施

生徒会保健委員会は、“CAP-Dシステム”で設定した委員会の重点成果指標の達成を図るために、毎学期に生活リズムチェック週間を設け、就寝時刻や自立起床、メディア使用時間等の5項目で自己評価を行い、レーダーチャートで自己の生活を振り返り、改善を図る取組を全校で実施している。

保健委員会は、生活リズムの大切さ等について中学生向けに文部科学省が作成した冊子『早寝早起き朝ごはんで輝く君の未来』を取り寄せて全校生徒に配付し、集会で冊子を利用した〇×クイズなどを行い、早寝早起きを呼びかけた。

① 起床時刻は、 <u>6時45分</u> までに起きます。	② 朝、自分で起きることができます。	③ ゲーム・テレビ・スマホ・携帯・タブレットなどのメディア使用時間は、 <u>1時間30分</u> までにします。	④ 就寝時刻は、 <u>12時00分</u> までに寝ます。	⑤ <u>朝からなるべくけいはいをさわらないこと</u> を頑張ります。(自分の生活目標)			
【自己評価をしよう! よくできた〇2点 : できた〇1点 : あまりできなかった△0点】							
	16日 (月)	17日 (火)	18日 (水)	19日 (木)	20日 (金)	合計点数	今週の評価をグラフに表してみよう。
① 起床時刻 6時45分	○	△	○	△	○	5	
② 自立起床	○	○	○	○	○	7	
③ メディア使用 1.5時間	○	○	○	○	○	8	
④ 就寝時刻 12時00分	○	○	○	○	○	9	
⑤ 自分自身の目標 (けいはい)	○	○	○	○	○	5	
☆あなたの振り返り おきるのが苦手だからそこをもっと頑張りたいとおもいます。				☆おうちの方から(家庭での様子などを記入していただけると幸いです。) 自分なりに計画を立てていきたいと思います。			

生活リズムチェックシート

令和4年度は、日本睡眠学会理事長の久留米大学学長内村直尚氏を招聘した睡眠に関する講演を保健委員会の運営で実施した。「睡眠が疲れの回復だけではなく、学習したことの定着や運動能力にも大きく影響していることが分かった。」等の感想が聞かれた。

③ お弁当の日の実施

生徒会給食委員会は、朝食摂取率の向上を図るために、食への関心を高めようと土曜授業の日を「お弁当の日」として弁当の手作りを推進している。

弁当を作ってくれた家族に感謝の言葉を伝え、食事後の容器は自分で洗う「ありがとうコース」、家族に調理してもらったおかずを容器にきれいに入れる「盛り付けコース」、家族に調理法等を教してもらいながら弁当をつくる「料理にチャレンジコース」、生徒一人で弁当を作る「まかせてコース」、の4つのコース



「お弁当の日」の取組を呼びかけるプリント

の中から生徒自身が選んで弁当を準備する取組を行っている。

家族が多忙であったり、家庭に朝食を摂る習慣がなかったりしても、自分で朝食を摂るスキルの向上を目指した取組である。教職員も全員参加し、慣れない手作り弁当を生徒に披露する場面もあった。



生徒自作の弁当

前日に友人と相談する男子生徒の姿や、当日に互いの弁当の工夫点を紹介し合う様子もあった。アニメのキャラクターをイメージしたものもあった。

コロナ禍で、家庭科の調理実習も十分にできない中ではあるが、調理への関心も高まり、「来年は、コンクールにしたい」との生徒の意見も生まれている。

④ 読書活動の推進

生徒会図書委員会は、テレビ視聴やゲーム機・スマートフォン使用の時間を減らし、読書の時間を増やそうと、朝の全校読書、クラス輪番の図書室での朝読書、ブックトーク、書店を訪問しての選書活動、家庭蔵書寄付のお願い、読書クラスマッチ、学級文庫の設置等を生徒の読書状況を分析しながら考案して実行した。



ブックトークの様子

朝読書を行っているにも関わらず月に1冊も読書していない生徒が多かった。このことから、読み始めた学級文庫の本を続けて読んでいない生徒がいる課題に気づいた図書委員は、読書記録を記入できるしおりを作成した。読みかけの本を読み終えるまでしおりを挟む活動を推進している。読書記録欄への記入が埋まった生徒からは、「読書量の多い人のしおりは色を変えて、シルバーやゴールドにしたらどうか」等のアイデアが図書委員会に寄せられている。



図書室での朝読書

令和2年度から、朝読書の時間を充実させ、落ち着いた学校生活を創造することを目的に、職員の勤務開始時刻から1校時の開始時刻までの時間を35分間に拡大しており、このことも読書量の増加や生活習慣改善の効果を生んでいる。

図書委員を3年間務めた男子生徒は、2学期末に全校生徒の前で「私は、もともと人前で発表することや文章を書くことは得意ではありません。しかし、私は、図書委員として3年間活動し、本と関わる機会が増えました。本を読むことで読解力や文章力がついたと思います。本には友だちを引き寄せる力もあります。読書を通して、同じジャンルの作品が好きな仲間と出会うことができました。」と発表をして、読書推進を呼びかけることもあった。

⑤ その他の創造的な取組

〈スポーツウィーク〉

生徒会体育委員会は、生活リズムを整えるのに適度な運動も必要と考え、運動部活動に参加していない生徒にもスポーツの楽しさを味わってもらおうと、昼休みにシッティングバレー大会やミニ



シッティングバレーの様子

サッカー大会、ドッジボール大会などのスポーツに親しむスポーツウィークの取組を毎学期に実施したり、参加の呼びかけを行っている。

<ちょボラ>

生徒会 JRC 委員会は、早起きした時間を有効活用しようと、ちょボラ(ちょこっとボランティア活動)を提案し、通学路等の地域の美化活動を推進している。男子バスケットボール部は週 2 回の町シンボルロードの美化活動を継続して実施しており、令和 4 年度に全国表彰も受けた。



朝の美化活動

さらに広く地域に恩返しをしたいと考えるようになった生徒は、令和 3 年度から、部活動がない毎月第一水曜日の放課後に、参加希望者を募り、活動場所を自分たちで考えて美化活動に取り組んでいる。令和 4 年度には、卒業した小学校に集合して周辺の美化活動を行う取組も生まれている。

<生活ノートの活用>

生徒会学習文化委員会は、生活ノートに「今日の家庭学習計画」の欄を設けて、帰りの会で帰宅後の自主学習の計画を立てる取組を行っている。生徒は、家庭学習を始める時刻と予定している学習内容を記述し、班内で記述を確認して互いにアドバイスをしたり計画を参考にしたりしている。翌朝には、計画通りに家庭学習を実施できたか生活ノートに振り返りを記述している。

<ゆうあいタイム>

コロナ禍が 2 年以上終息しない中、マスクを常時着用した生活が定着していることが、お互いの表情を読み取れず、町内の 6 つの小学校から入学してくる生徒たちの仲間づくりに大きな障害となっている。友人との関係がうまくいかずに、悩みを長時間のスマートフォン使用で紛らす実態もあった。休校措置による生活リズムの崩れと併せて不登校傾向の生徒増と大きく関係している様相がある。



ゆうあいタイムの様子

そこで、生徒会代議員会は、重点成果指標の一つ「御船中の生徒で良かったと思う生徒の割合 95% 以上」の実現を目指して、「ゆうあいタイム」を試みている。

金曜日の清掃時間 15 分間を“ゆうあいタイム”とし、生徒会代議員がファシリテーター役をして学級毎にテーマを設定したグループエンカウンターを行っている。名称は、校訓の一つ「友愛」と「You & I」「言い合い」の意味を兼ねたものにした。

生徒からは「なるほど！という意見がたくさんあって、おもしろかった」などの感想が聞かれ、さらに工夫改善していくことで効果的であると考えます。

その他にも、課題を解決しようと、学級ごとの取組も生まれている。

(2) 保護者と連携した啓発活動

① 通知表を活用した長期休業中の家庭内点検

休校期間や長期休業中に生活リズムの崩れがあることの課題をふまえて、その課題を解決するために家庭内の話し合いや点検を推進したいと考え、通知表の様式を変更した。

長期休業に入る前に休業中のスマートフォンやゲーム機等の使用ルールを家庭で話し合ってもらい、終業式に担任教師から通知表を受け取ったら生徒自身が約束を記入するようにした。

出欠の記録						
学期	授業日数	停止・忌引等	要出席日数	欠席日数	出席日数	備考
1		0		0		
家庭でのメディア使用						
SNSやゲーム等のメディア あなたの家庭での使用ルール						
夏休みの自己評価				家庭から (〇をつけてください)		
				よく守っていた	だいたい守っていた	守れていなかった
所見						
担任より			保護者より		保護者印	

通知表様式の一部

そして、休業中の自己評価や保護者評価を記入して新学期スタート時に担任教師に提出するようにしている。

「子どもの自己評価を見て、スマホのルールについて親子で話し合う時間がありました。もっと関心をもって声かけをしています。」等の意見が保護者から寄せられている。

また、通知表には、CAP-Dシステムで実施したアンケートの回答用紙も綴じて、生徒の自己評価を保護者に知らせることにしている。

通知表を、学校生活の様子を家庭に知らせ、家庭生活の様子を学校に知らせる、双方向の連絡ツールにして、教育相談等に活用している。

② 朝食コンテスト・標語コンクールの取組

P T A家庭部と生徒会保健委員会・生徒会給食委員会が連携して「わくわく朝食コンテスト」と「生活習慣標語コンクール」を実施している。CAP-Dシステムで朝食摂取や就寝時刻の実態を知り、保健委員会や給食委員会の生徒たちの活動を応援したいと考えたP T A家庭部の保護者の提案で取組が動き始めた。

夏季休業前に募集のお知らせを全校生徒に配付し、夏季休業明けに作品を集めている。生徒が自分でつくった朝食の写真とレシピを募集し、優秀作品を表彰して紹

介するコンテストには、子どもらしい工夫のある朝食の応募があった。応募作品には夏季休業中に家庭で相談して取り組んだ様子がうかがえる。

生活リズムに関する呼びかけの標語コンクールは全校生徒が参加した。

「わくわく朝食コンテスト」と「生活習慣標語コンクール」は、保健委員会

と給食委員会の生徒が予備審査を行い、PTA家庭部の保護者が本審査を行い、優秀作品を決定している。優秀作品を表彰して校内に掲示した。

令和4年度は優れた朝食レシピや標語を掲載した令和5年カレンダーを作成し、町内小中学生に配付する計画である。



朝食コンテストの入賞レシピの掲示

③ スマホ等使用の新ルールを推進する取組

CAP-Dシステムで生徒のスマホ等使用に依然として課題があると考えたPTA役員会は、生徒会が推進しているスマホ等使用の新ルールの遵守を支援しようと、安心メールで保護者に呼び掛けたり、メールのアンケート機能を活用して“保護者の心がけ(ルール)”募集を全保護者に呼びかけるなどしている。

今後は、PTA役員会で数点に絞ったルールや標語を、全保護者の投票で決定する運びである。

【保護者が考えたルールや標語の例】

- 保護者が使用状況を確認する
保護者のスマホと連動させて管理する
夜10時から朝8時まではスマホを使えないよう設定する
- み：見直そう、ながらスマホの デメリット
ふ：不快感、与えていないの？その言葉
ね：熱中症、スマホもなるよ 使い過ぎ
- 守ってほしい み・ふ・ねの約束
守ってあげたい 子どもの現在も未来も

④ 生徒活動支援金の設置

CAP-Dシステムの中で課題を解決する新たな取組が生まれているが、それらの取組の中には経費が必要な場合もある。

そこで、PTAは生徒の創意工夫ある活動を支援する目的でPTA予算の中に「生徒活動支援金」の項目を新たに設け、生徒や保護者の創造的な活動や講師招聘の謝金や旅費等を助成する仕組みを作った。

この支援金を活用して、猛暑の中も冷房の効いた町の施設を利用した講演会も実

施できている。経費を必要とする生徒の活動アイデアも、費用対効果を校長とPTA会長が認めれば具現化できるようになった。

⑤ 学校便りの発行

PTAの役員には、CAP-Dシステムの実態調査の結果を速やかにグラフ化して提供しているところである。学校ホームページでも結果を紹介している。このことで、PTA会員(保護者)が家庭教育の課題を理解したうえでの活動につながっている。

これに加えて、全生徒・保護者を対象に学校だよりと保健だよりを配付している。学校だよりは町内各戸を回覧し、小中学生の基本的な生活習慣の育成の理解を図っている。

学校だよりの表面は校長の教育理念と教育活動の記事、裏面は啓発記事と町民の寄稿で構成している。ある区長からは「中学校だよりがあると、回覧が遅くなる。」と有難い苦情を聞いている。「裏面がとても面白い。家族みんなで回し読みしている。」等の町民の記事への共感の声も多く、学校だよりを町民の多くの方が読んでおられることがわかる。学校だよりが地域の文化醸成にも寄与できると実感している。

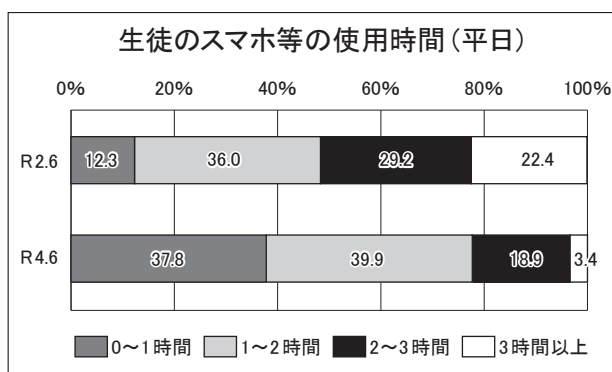
この他にも、本校では、学級通信や学年通信、特別支援教育通信等、各種通信を発行している。それぞれの教職員の思いが、通信を通して伝わってくる。そこには、生徒に向き合う真摯な姿や温かな思いが伝わってくる。保護者もそれらの通信を通して本校職員の思いを感じ取ってくれ、非常に協力的である。

4 研究の成果と課題

(1) 基本的な生活習慣の定着について

「携帯電話やスマートフォン(通信機能があるタブレット)の使い方を家の人と約束したことを守っていますか」との問いに対して、「あまり守っていない」または「約束していない」と回答した生徒の割合が令和2年6月時点で27.9%だったが、令和3年11月の調査では19.4%と減少し、状況が改善されている。「約束をしていない」と回答した生徒は22.8%から11.6%へ半減した。

生徒会が主体となった新ルールの制定と呼びかけ、PTAと連携した家庭の約束内容の調査や講話、小学校に出向いての保護者への職員講話が効果を生んでいると考える。



しかしながら、スマートフォンやゲーム機依存が解消できていない生徒もまだおり、スクールカウンセラーや福祉機関と連携した個別の家庭支援が必要である。

右のグラフは、朝食に関する実態の変容と就寝時刻に関する変容を示すものである。中学生の朝食摂取は、幼児期や児童期の生活習慣、すなわち保護者の生活習慣に大きく影響を受けている。就寝時刻も自己管理の能力を高めないと改善が難しいものである。

しかし、生徒会を中心にした生徒主体の取組と保護者と連携した取組が確実に成果を示していると言える。

就寝時刻の改善に伴い、毎日朝食を摂る生徒の割合も増加している。朝食レシピコンクールも生徒の調理スキルを育むうえで効果的であると考ええる。

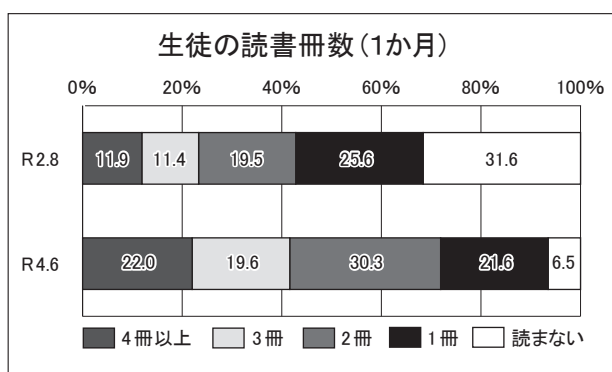
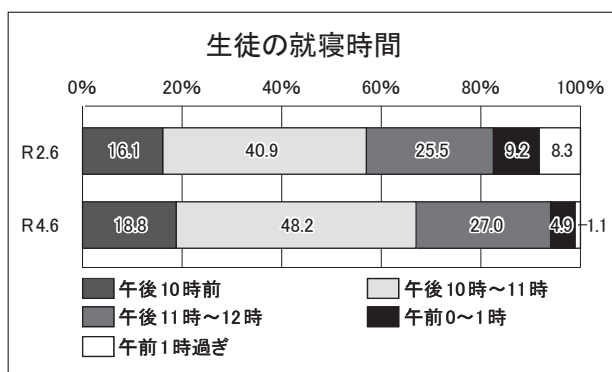
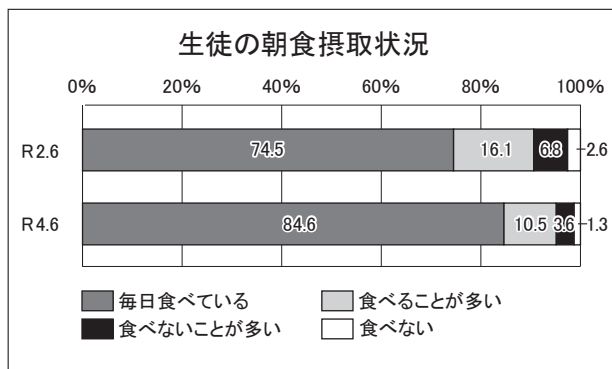
朝食の習慣がない保護者も協力して子どもに朝食を準備し始めた家庭や生徒自らが準備をして朝食を摂り始めた状況もある。

中学生がやがて親となり育児に携わり、次の世代の生活習慣に大きな影響を与えることを考えれば、本校の取組を継続し、幼保小高との取組連携を更に緊密にしていきたいと考える。

図書委員会の工夫溢れる取組で生徒の読書量は確実に増えている。スマートフォン等を脇に置き、本を手にする生徒が増えていることは、生活リズムの改善だけでなく、豊かな心情や想像力、学力を育むうえでも効果的と考える。

生徒の読書への関心が年を追うごとに高まっている状況に、活動意欲を高めた教職員の読み聞かせチームも発足し、中学校では珍しい本の読み聞かせも始まった。教職員の朗読を聞くことで生徒の読書への関心が更に高まり、朝読書がマンネリ化せず推進できている。

校区内の小学校でも読書活動を推進する取組が充実し始めている。



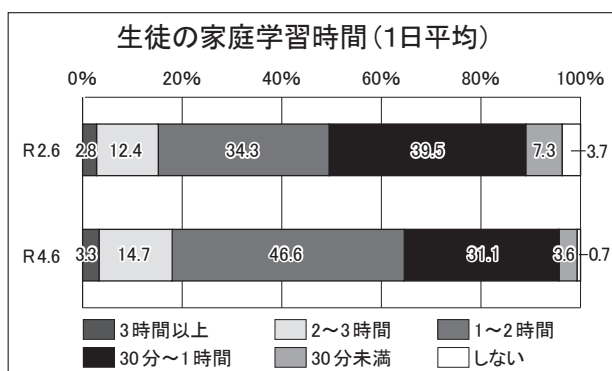
家庭学習の習慣化についても、取組を始める前に比べて改善の傾向が見られた。自分で決めた時刻に家庭学習を始める生徒の割合も増加しており、それに伴って家庭学習の時間も増えている。

家庭学習時間も、第2学年を除いて学習時間が令和2年度当初に比べて増加している。30分未満の生徒は少なくなっている。

宿題以外の自主学習への取組も、「ほぼ毎日している」「ときどきしている」と回答した割合が増加しており、実践が家庭学習の習慣定着、内容の充実にも効果が現われていると言える。

CAP-Dシステムのアンケート調査結果から成果をあげている学級が一目瞭然となり、成果をあげている学級の取組に学ぶ担任教師や生徒会学習文化委員もいる。

家庭学習の仕方や自学ノートの内容を交流する時間を設ける取組もある。



(2) 学力の向上について

家庭学習の習慣化等の基本的な生活習慣の定着が学力向上にどのように影響しているかについて述べる。学力の状況について生徒の成就感、達成感の面で検証してみた。

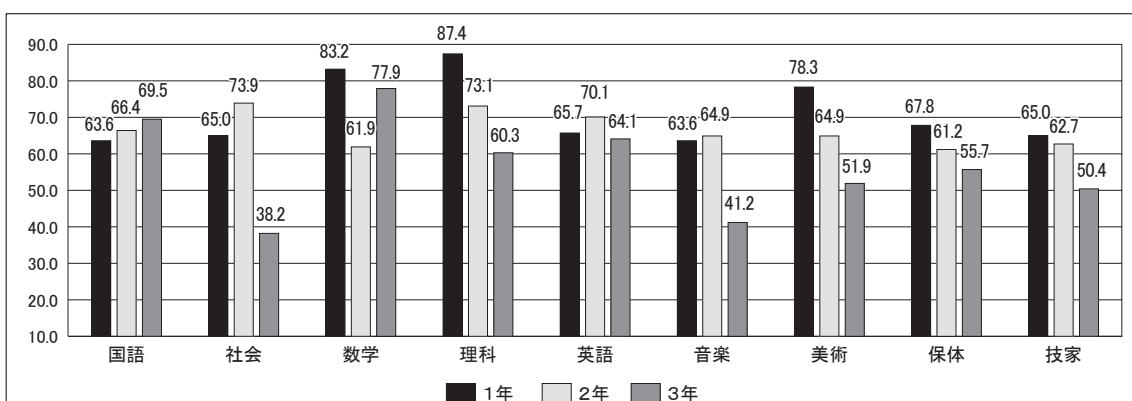
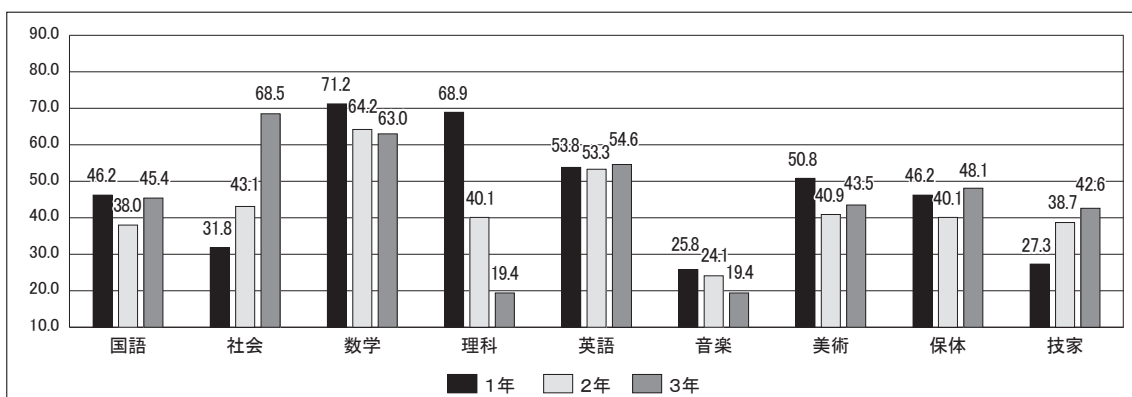
「1時間の授業ごとに『できた』や『わかった』『ためになった』と感じることが、いつも(ほとんど)できていると思うか」との問いに、「そうだ」と回答した割合の状況が次ページのグラフである。

このグラフは教師の授業力に大きな影響を受けるものであり、一概に経年比較をすることはできないが、令和2年度当初の数値が50%に満たない教科が多かったことを考慮すれば、学習内容を「できた」「わかった」「ためになった」と感じている生徒の割合が増えていることが明らかである。

これは、時事通信社の内外教育(2021年11月26日発行 第6956号)でも紹介された本校の授業改善(SMARTな授業実践)が進んでいることも基本的な生活習慣を基盤とした家庭学習の充実と相乗効果を生んでいると考えている。

【SMARTな授業実践の視点】

- S : シンプル . . . 学習内容を精選し焦点化する
- M : 目的・目標 . . . 単元のゴールの姿、本時のめあてを設定する
- A : アクティブ . . . 児童生徒が活動する時間を確保する
- R : 練習 . . . 定着を図る時間を確保する
- T : たしかめ . . . 板書をもとに学習のまとめ・振り返りをする



毎時間の授業で「わかった」「できた」と感じている生徒の割合(上：R2.6 下：R4.6)

新学習指導要領で明確になった育成を目指す資質・能力の大きな柱の一つが“学びに向かう力”であることから、学びへの意欲を喚起する「できた」「わかった」「ためになった」と毎時間の授業で感じることは、重要な要件であり、本研究実践が学力向上にも好影響を与えていると考える。

国や県の調査においても学力の向上傾向を確認することができた。

5 おわりに

基本的な生活習慣は、人間の態度や行動の基礎となるもので、生徒にとって、社会的な自立や自己実現のために大変重要であり、様々な要素からなっている。時間を守る、物を大切に使う、服装を整えるなどの学校生活を営む上で必要なきまりに関する生活習慣。あいさつや礼儀、他者とのかかわりや自らの役割を果たすなどの集団生活にかかわる生活習慣。授業規律や態度、忘れ物をしないなどの学校における様々な活動を行う上での生活習慣などがある。

学校教育の最大の責務である児童生徒の学力向上を図るために、その基盤となる基本的な生活習慣の育成に、生徒の主体的活動の充実と保護者と連携した啓発の工夫の両面からアプローチする研究実践を行ったところであるが、その取組方針は成果を少しずつ生んでいるといえる。

しかし、深夜0時以降に就寝する生徒が依然として約5%おり、このことが早起き

や朝食摂取等に影響している。これらの生徒の背景が厳しい家庭環境であることも明らかとなった。家庭環境が厳しい生徒に、基本的な生活習慣を定着させ学力を保障することに公教育としての主眼をおいたチーム御船中の創造的な教育を今後も推進していきたい。

学力の基盤となる基本的な生活習慣の育成に取り組み、その成果を確認することができた。自らの取組の成果を生徒自身が確認することで自信や主体性も高まっている。本研究実践を継続するとともに、御船中学校区家庭教育支援チーム(仮称)を各方面の協力を得て創立し、家庭環境に課題を抱える生徒の個別指導や保護者支援等、生徒の進路を保障する取組に地域の力を結集して取り組みたいと考える。